

メディアリテラシー・情報倫理における 大規模アクティブラーニングの実践例

田中 健吾^{1),2)}

1) 香蘭女子短期大学 情報センター

2) 香蘭女子短期大学 ライフプランニング総合学科

tanaka@koran.ac.jp

Practical Example of Large-Scale Active Learning

in Media Literacy and Information Ethics

Kengo Tanaka^{1),2)}

1) Information Technology Center, Koran Women's Junior College

2) Comprehensive Studies for Life Planning, Koran Women's Junior College

概要

本稿ではメディアリテラシーおよび情報倫理に関する 3 つのアクティブラーニング (AL:Active Learning) を構築・実践した内容について述べる。はじめに実施した AL はキャメロン・ラッセルの TED TALK を、次に実施したものは各受講生が自分の好きな作品について作成した作品紹介文を利用したものであり、主に著作権や剽窃行為の理解を深めることを目的としている。最後に実施した AL はシェリー・タークルの TED TALK とそれに対する 7 人の対談記録を利用したものであり、ソーシャルメディアの日常利用について考えを深めることを促すものである。3 つの AL ではいずれも Google Form を利用することで、受講生の記述を受講者間で効率的に公開・共有し、多くの意見や考え方に触れられる状況を実現したことが本質的な役割を果たしており、大人数で実施可能である。3 つの AL の終了後に行ったアンケート調査からは、受講生に一定の効果があったことが確認できた。

1 はじめに

著者は福岡市にある短期大学に勤務しており、所属学科で 1 年次必修の講義科目としてメディアリテラシーを担当して 2 年目になる。受講者数は 140~150 人である。科目名はメディアリテラシーであるが、情報倫理の内容も含めて授業内容を構成している。本科目を担当することになった時の第一印象は、

(i) 科目の内容が広範であること。

(ii) 学科の専門性に依りて科目の内容に偏りがあること。

(iii) いわゆる講義科目的なスタイルだけでは授業自体の成立が困難であること。

(iv) ソーシャルメディアが日常生活に浸透してきた現在ではその内容は不可欠であること。などを強く感じていた。

授業内容を構成するに当たり、他学のシラバスや同科目名の関連書籍を多数調べた結果、(i) お

よび (ii) は予想通りであったし、ある意味では (i) と (ii) は同義であるともいえる。したがって、所属学科の学生に有益な内容を優先して、学生生活や社会人生活に必要な、より一般的で実用的な内容を採用することにした。

(iii) は本稿の主題であり、講義内容と連動した映像教材を用いたり、3 つの AL を構築して実践したりすることで、受講生に能動的な学習の機会を提供することができたと考えている。

(iv) については、ソーシャルメディアのビジネスモデルや日常利用に対するリテラシー、ソーシャルメディアの負の側面 (バカッター、バイトテロ、リベンジボルノ、自撮り被害、他)、フェイクニュースや災害時の情報爆発と減災への応用などを授業内容とした。その中で、上記 3 つ AL の内の 1 つとして、ソーシャルメディアの日常利用に対する理解を深める内容を実践した。

本稿では、同科目で実践した AL の内容と、それらに対する学生の評価結果について次の通りに報告する。まず 2 節では、本稿の AL を構築した

際の広い意味での目的と、その基本的な手法について述べる。3節では、同科目の中ではじめに実施した、キャメロン・ラッセルのTED TALKを用いたALの実施内容について、第4節では、2番目に実施した作品紹介文を用いたALの実施内容について、第5節では、最後に実施したシェリー・タークルのTED TALKとそれについての7人の対談記録を用いたALについて、それぞれ説明する。最後に6節では、3つのALの実施に関する学生の評価について述べると共に、本稿のまとめを行う。

2 アクティブラーニングの構築

この節では、3～5節で述べる3つのALに共通した目的や、その手法について述べる。

2.1 広い意味での目的

メディアリテラシーの主なテーマの1つは言論の自由である。言論の自由は日本ならびに諸外国の歴史的な経緯や現状など、広範に事例が存在する。著者が同科目をはじめ担当した2017年度には、中国の作家、人権活動家であり、2010年にノーベル平和賞を受賞した劉曉波氏が、獄中で死去するという印象的な出来事があった。この出来事に代表されるような、言論の自由が十分に保障されていない国の事例や、非民主国家がいかにして言論の自由を獲得してきたかというような内容は、極めて重要なことであるが、この講義の受講生には、より実用的な内容を優先することが賢明だと感じていた。

言論の自由に正対した内容からは、幾分外れているかもしれないが、著者は受講生に、「情報を発信することを経験する」「情報を受信し、評価することを経験する」「意見・解釈の多様性に触れる」ということを3つのALを通して、体験させたいと考えていた。ここでの情報を受発信する空間は40～50名程度で構成される各クラスであるので、いわゆるメディアの産業構造に起因する情報の偏りなどが生じるということは、もちろん無いわけだが、それでも、他者に伝わるように情報発信したり、他者の情報を責任を持って評価したり、他者の意見・解釈などの多様性に触れたりすることは、極めて重要であると考えていた。その結果、言論の自由がもたらす多様性の豊かさを、歴史的経緯というよりは、日常生活的なレベルで受講生が間接的に感じ取ってくれることへの期待を込めて、本稿で紹介するALを構築した。

2.2 Google Classroom と Google Form の利用

3つのALの詳細は後述するが、いずれにも、各受講者の記述を収集して、それを各クラス内で共有するという共通したプロセスが存在する。ここでは、その手法について説明する。

3つのALの管理はGoogle Classroomを用いて行った。いずれのALでも、設問が設定されており、受講生はそれに対する解答を提出することになっており、設問をGoogle Formで作成することで、CSV形式で解答を収集することができる。収集した解答はExcelで編集してから共有する場合もあれば、Google Formでそのまま共有することもある。Google Formには解答を自動集計してグラフ化してくれる機能も備わっており、受講者がクラス全体の解答の傾向を把握するのに役立つ。

上記のシステムを利用するにはG Suite for Educationのアカウントが必要になるが、入学時にすべての学生に貸与しており、授業で利用できる状況は整っていた。

3 キャメロン・ラッセルのTED TALK を用いたアクティブラーニング

この節では、キャメロン・ラッセルがTEDxMidAtlanticにて「Looks aren't everything. Believe me, I'm a model. (ルックスだけが全てじゃない。モデルの私が言うんだから信じて。)」というタイトルで講演した動画[1]を利用して、ALを構築・実施したので、その内容について説明すると共に、講義内容との連携方法についても述べる。

3.1 キャメロン・ラッセルと講演内容

ラッセルは16歳の時から活躍していた白人女性のスーパーモデルであり、講演時は25歳であった。講演内容はスーパーモデルという職業の実情と、その業界が白人に偏って成立していること、そして、スーパーモデルは努力してなれる職業ではなく、遺伝による産物だということを説明しつつ、人の外見は非常に大きな影響力があり、外見によりスーパーモデルという職業が成立していたり、人種差別という人類の負の営みが存在していたりするということを主張している。そして、最後には、彼女自身、外見を活かしたスーパーモデルという職業に就いて、色々な成功や役得をしてきたが、世界一外見に不安を感じる職業でもあり、

幸せなことばかりではないと説明しつつ、また、白人に偏った人種差別的な職業で自分が恩恵を受けてきたと締めくくっている。

講演内容は、上記のようにメディアリテラシーの示唆に富む内容が多く含まれており、教材として採用することにした。

3.2 アクティブラーニングの実施内容・手順

この AL の実施内容はラッセルの TED TALK を視聴することで、同講演に模擬的に参加・取材したこととし、その講演内容に関する記事を書くというものである。課題は前半と後半の二部構成になっており、より具体的な実施内容・手順は、図 1 の通りである。

「前半の課題内容を説明する」という部分では、TED TALK を視聴して取材記事を書くという最低限の説明しか行わず、取材記事の書き方や書く際の注意事項などを解説することは取って行わなかった。但し、自分の感想文を書けばよいと勘違いしてしまう学生が居るので、感想文ではないことと、書いた記事は受講者間で公開・共有することの 2 点だけは付け加えた。

「後半の課題内容を説明する」という部分では、提出された記事全部を平等に評価してベスト 3 の投票を行うこと、評価理由では、評価する部分とその理由を明確にすること、投票の集計結果と投票した評価理由をクラス内で公開・共有すること、の 3 点だけを説明した。

3.3 講義内容との連携

上記課題で受講生が作成した取材記事の一部を取り上げて、講義内容と以下の様に連携させた。

一つ目は、著作権や剽窃行為（レポート作成時に関する注意を含む）に関する講義との連携である。受講生が書いた取材記事の中から、この TED TALK に関するサイトの記述をコピー&ペーストして用いている記事のいくつかを剽窃行為の例として紹介することを行った[2]。

二つ目は、メディアによる偏向報道との連携であり、受講生の取材記事の中から、この TED TALK の内容と乖離しているいくつかの記事を、偏向報道の疑似的な例として紹介した。

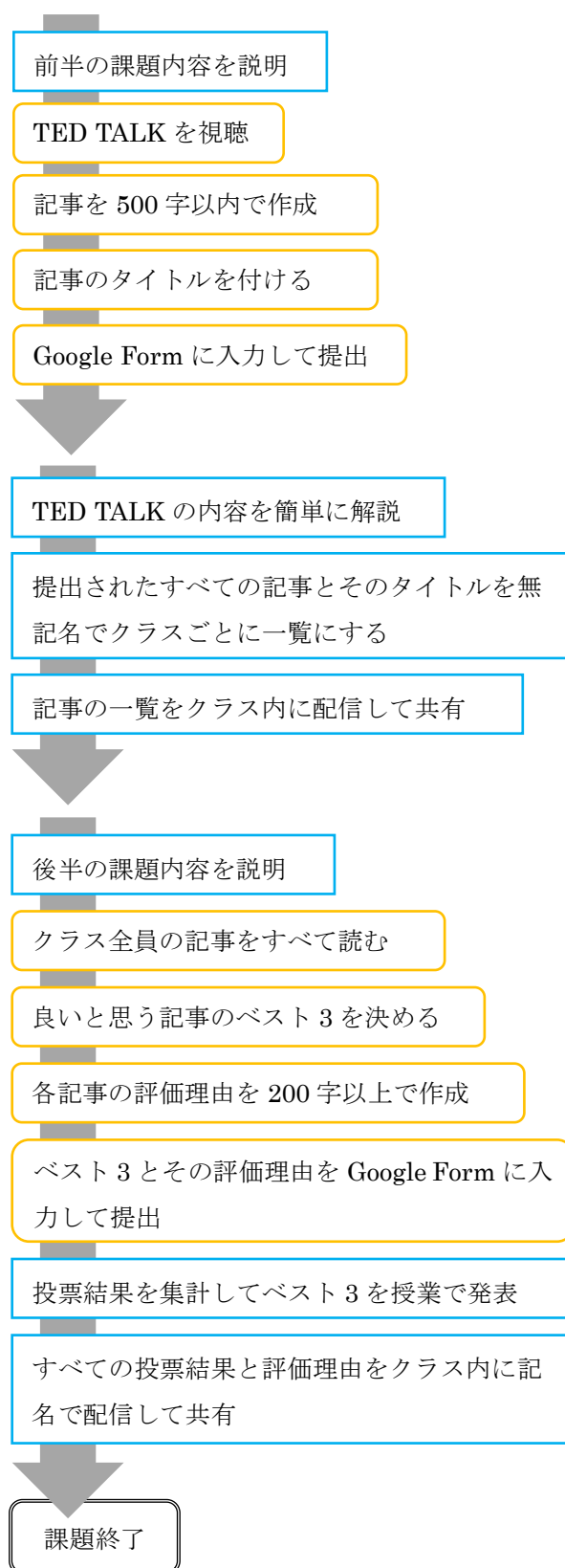


図 1 キャメロン・ラッセルの TED TALK を利用したアクティブラーニングの実施手順。青色枠は教員が、オレンジ色枠は受講生が担当する部分を、矢印は課題の進行方向を示す（図 2、3 でも同様の意味で用いる）。

4 作品紹介文を用いたアクティブラーニング

前節の AL に接続して、著作権や剽窃行為の理解をさらに深めるために、受講生が作成する作品紹介文を用いて AL を行った。この節ではその実施内容・手順と、その趣旨について述べる。

4.1 アクティブラーニングの実施内容・手順

この AL の実施内容は受講生が自分の好きな作品（映画、ドラマ、音楽、書籍、他）について、前半ではその紹介文を作成し、後半ではクラス内で公開・共有して、その内容について各受講生が評価を行い、投票するという二部構成の課題を行った。その詳細は図 2 の通りである。

「前半の課題内容を説明する」という部分では、「準備シート」という資料を用いて、作品紹介文を作成する前準備を行うことを説明した。具体的には、次の 3 点：

- ・ 作品の著者・出版社・出版年月日等の情報。
- ・ 作品の特徴や良い所・好きな所（3 つ以上）。
- ・ 作品から受けた（受けるであろう）印象や影響、そのときに関連した過去の体験など。

を記載することを指示した内容になっている。「準備シート」を作成した後は、その記述内容をキーセンテンスとして、作品紹介文を 600 字以上で構成するように促している。

「後半の課題内容を説明」という部分では、それ以下のオレンジ色枠の手順について説明するとどめて、それ以外の特別な指示は加えていない。

4.2 講義内容との連携

この AL の趣旨も、前節と同じく著作権や剽窃行為の理解を深めることにあるが、最大の相違点は 3.3 で述べたように、前節の AL の実施後に剽窃行為は著作権に抵触することを説明していることである。この状態で本節の AL を実施することの意義を以下に述べる。

自分の好きな作品を紹介するという、受講生が前向きに捉えられる動機を備えつつ、自分のオリジナルな言葉で作品紹介文を作成しなければならないという意識を持った状態で、この課題に取り組むところが最も重要なポイントである。また、

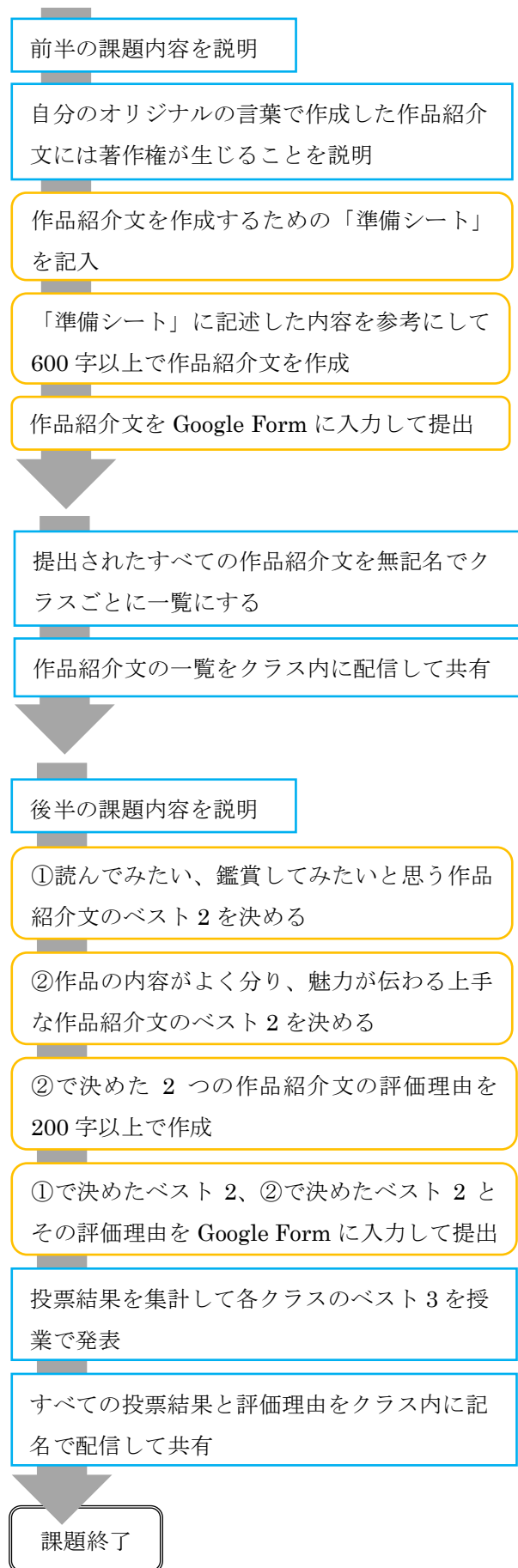


図 2 作品紹介文を利用したアクティブラーニングの実施内容・手順

作品紹介文を作成した後は、「クラス内で公開・共有されること」「受講者間で投票することで、自分の著作物が評価されること」の2点を前提としていることも重要であると考えている。即ち、著作権が生じる著作物を作成し、公開するということを強調することで、その行為の有意義さや大変さを体験し、著作物が著作権で保護されていることの意味を、少しでも著作者に近い立場で体験しようという試みである。

5 シェリー・タークルの TED TALK を利用したアクティブラーニング

本節では、シェリー・タークルが Official TED Conference にて「Connected, but alone? (つながっていても孤独?)」というタイトルで講演した動画[3]を利用して、AL を構築・実施したので、その内容について述べたい。この内容は文献[4]で述べた内容に基づいているので、詳細はそちらに譲ることにするが、その後、いくつかの改良を経ているので、その点を含めて本稿では、AL の内容・手順の概要を簡潔に説明すると共に、その趣旨について述べたい。

5.1 アクティブラーニングの実施内容・手順

この AL は、前準備と前半、後半の三部構成になっている。その手順および内容を簡略化して図3に示す。

課題の前準備の目的は TED TALK と対談記録の内容を十分把握することになっている。受講生が TED TALK の動画を視聴した後に、

- ・ 括弧抜きにした「トークの要約資料」の穴埋めに取り組ませる。
- ・ 「トークの要約資料」の穴埋め部分の解答とトークの内容に関する解説を行う。
- ・ 対談記録中の難しい語句の意味を説明した「語句解説資料」を準備する。
- ・ 対談記録の内容の把握度合いを確認するための設問①に取り組ませる。

などを行うことで、受講生に内容把握を促す前準備を行っている。

前半の課題である設問②の詳細は割愛するが、対談記録中で、

- ・ 登場人物が述べる意見に対して、受講生に賛成／反対の立場を明確にさせて、その理由や意見を記述する。
- ・ 登場人物が別の登場人物に対して質問をした

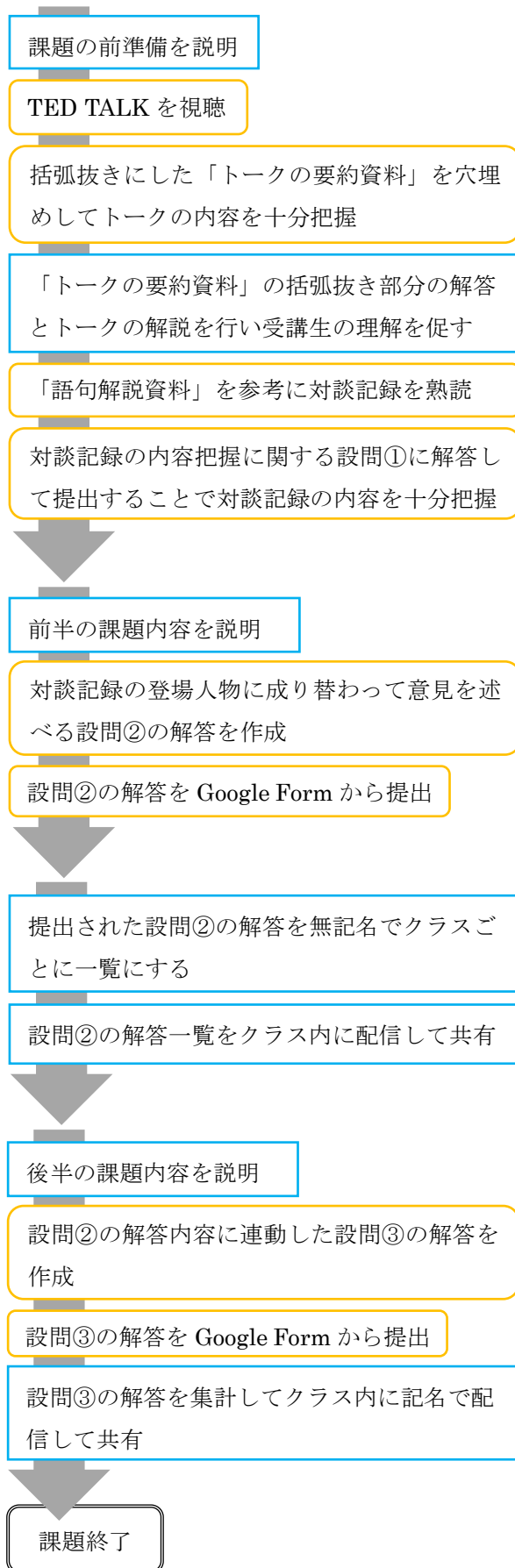


図3 シェリー・タークルの TED TALK を利用したアクティブラーニングの実施内容・手順

内容を、質問された人物の代わりに受講生に回答させる。その際、賛成／反対もしくは YES／NO を明確にさせ、その理由も記述する。

という内容で構成されている。

後半の課題、即ち、設問③では、これまでの2つの AL とは異なり、クラスで共有した設問②の解答の中から誰かの記述を選択して、その選択理由を記述するという形式を採用していない。文献[4]で報告した当時は、その様な形式を採用していたが、それらを廃止して、クラスで共有した設問②の解答に触れることで、自分の意見や考えをまとめるという設問や、自分とは異なる考え方の意見や、自分が興味・関心のある意見などを総括して、それに対して自分の見解を述べるという設問へと移行した。

5.2 アクティブラーニングの趣旨

1 節の (iv) に記述した通り、ソーシャルメディアの日常利用に関するリテラシーを授業内容に含める必要性を感じていた。ソーシャルメディアの負の側面やフェイクニュース、災害時の情報爆発などについては、講義形式を採用することができるが、いわゆる日常利用については、自分と同じ多くのユーザーの意見に触れることが重要であると考えて、この AL を構築した。その際の重要なポイントについて、以下に述べたい。

タークルはマサチューセッツ工科大学の心理学者であり、デジタルテクノロジーが人間の心理に及ぼす影響を研究してきた専門家である。このトークの内容は同氏の著書である文献[6]に基づいたものである。文献[6]は文献[7,8]に連続した3部作であり、同氏はこの3部作を通して、デジタルテクノロジーが人間の心理に与える影響について、肯定的な立場から否定的な立場へと変容しており、このトークの冒頭部分でもそのことに触れている。

対談記録はタークルのトークについて、7人が意見交換を行ったものであり、同氏のトークに対して賛同的でない意見の方が多く記述されている。

受講生が設問②に解答することで、疑似的に7人の対談に参加し、そこに各受講生が新たな意見を付け加えていくという具合である。その後、各受講生の意見を集約し、クラス内で共有することで、さらに多様な意見が付け加わるという状況を生み出すことが、この AL の最も重要なポイントであると考えている。

6 アクティブラーニングに対する受講生の評価とその分類

3つの AL が終了した後に、以下のアンケート調査を行った。

「3つの課題は、あなたのメディアリテラシー（情報倫理を含む）の向上や、それに資する新たな知識や経験の獲得に役に立ったと思いますか、思いませんか？」

この設問に対して、表1の6種類の選択肢の中から1つを選んで回答するというアンケート調査を行った。回答者数は97人であり、結果の内訳は表1の通りである。また、上記の選択肢を選んだ理由について自由記述による回答を得た。これに加えて、3つの AL に対する感想や意見についての自由記述による回答も得ている。本節では、表1のアンケート結果と上記2つの自由記述との関係について述べたい。

6.1 「肯定的な回答」とそれらの自由記述

表1の中で「とても役に立った」「役に立った」と回答した83人分を「肯定的な回答」と位置付け、その自由記述に対して、「①自己に関する内容」「②他者に関する内容」「③知識修得に関する内容」「④技術向上に関する内容」が含まれる記述をした人数を項目ごとにカウントして、表2にまとめた。①～④の項目に該当する内容を、複数含んでいる記述もあるので、その場合は、複数の項目にカウントしている。

上記の①～④の各項目が包含する主な内容は、①は「自分の考えを深めること、整理することができた」「自分の考え方が変わった」「成長することができた」、②は「他者の多くの意見に触れることができた」「他者の意見を評価することができた」、③は「知識が増えた」「知らない事実を学ぶことができた」、④は「文章力が向上した」「パソコンの操作技術が向上した」、などである。

次に、「肯定的な回答（83人）」の3つの AL に対する感想や意見（自由記述）について、項目①～④に加えて、「⑤課題の難易度・量」の記述をした人数を、項目ごとにカウントして表3にまとめた。

さらに、表2、3にまとめた2つの自由記述で、どちらか一方で、項目①～④の記述があれば記述人数にカウントするという具合に合算した結果を表4にまとめた。

	人数[人]	割合[%]
とても役に立った	11	11.3
役に立った	71	73.2
どちらでもない	11	11.3
あまり役に立たなかった	0	0
全く役に立たなかった	1	1.0
分からない	3	3.1

表 1 3つのアクティブラーニングに対するアンケート調査の結果（回答者数は97人）

	人数[人]	割合[%]
①自己に関する内容	39	47.0
②他者に関する内容	26	31.3
③知識修得に関する内容	44	53.0
④技術向上に関する内容	14	16.9

表 2 「肯定的な回答（83人）」の評価理由（自由記述）が含む内容とそれを記述した人数

	人数[人]	割合[%]
①自己に関する内容	41	49.4
②他者に関する内容	39	47.0
③知識修得に関する内容	18	21.7
④技術向上に関する内容	12	14.5
⑤課題の難易度・量	32	38.6

表 3 「肯定的な回答（83人）」の感想・意見（自由記述）が含む内容とそれを記述した人数

	人数[人]	割合[%]
①自己に関する内容	61	73.5
②他者に関する内容	48	57.8
③知識修得に関する内容	52	62.7
④技術向上に関する内容	24	28.9

表 4 表 2 と表 3 の項目①～④の合算

6.2 「それ以外の回答」とそれらの自由記述の内容

表 1 の「どちらでもない」「全く役に立たなかった」「分からない」の回答を「それ以外の回答」と位置付けて、それらの回答者の 2 つの自由記述の内容について、以下、述べる。

「どちらでもない（11人）」と回答した受講生の自由記述の内容は「肯定的な記述：4人」「それ以外の記述：7人」に大別される。「それ以外の記述

（7人）」には、「(a) 課題の難易度・量の多さ・理解不足：6人」「(b) 課題の内容に興味が無い：1人」「(c) 記述内容の共有・評価などの学習方法への批判：3人」という内容が含まれている。

「分からない（3人）」の内、1人は課題に取り組んでいないという状況であり、残り 2 人の自由記述は上記の (a) に該当する内容のみであった。

「全く役に立たなかった」という回答者の自由記述も (a) に該当していた。

7 まとめと考察

本稿では、メディアリテラシーおよび情報倫理に関連する 3 つの AL を構築・実践した内容について述べた。この節では、それらについてまとめると共に、いくつかの考察を行いたい。

2 節では、3 つの AL を実施する共通のシステムとして、Google Form の利用について述べた。本稿のタイトルにもあるが、140～150 人という大規模人数の授業で 3 つの AL を昨年度に引き続き今年度も実施することができた。受講生全体をクラスごとの 3 グループに分けたが、1 グループの人数が多くなりすぎると、グループ内で共有する記述の数が増えるので、1 グループ 40～50 人が上限であると思われる。人数が多くなれば、分割するグループの数を増やせばよいので、大規模 AL の趣旨に十分応えられる内容といえる。

3 節では、一番目を実施した取材記事を作成する AL の内容・実施手順と、この AL と講義内容である著作権や剽窃行為、メディアの偏向報道との連携について述べた。ラッセルの TED TALK を採用したのは、メディアリテラシーに関連する内容が多く含まれていたからであるが、この動画でなければ AL が成立しないというわけではない。

4 節では、二番目を実施した作品紹介文を用いた AL について説明した。前準備として、一番目の AL で作成された取材記事のいくつかを利用して、剽窃行為を指摘した。その後、自分のオリジナルな言葉で作成した文章には著作権が生じることを理解した状況下で、受講生は作品紹介文を作成することに臨んだ。一番目の AL も、著作権や剽窃行為の理解を深める趣旨であったが、この点が重要な相違点である。尚、作品紹介文という設定は安直に思えるかもしれないが、大半の受講生が共通して著作物を生みだしたいという動機が持て

る課題設定を、筆者は他に思いつかない。この点がこのALを構築した際の最重要ポイントである。

5節では、三番目に実施したタークルのTED TALKとそれに対する7人の対談記録を用いたALについて説明した。講義形式が相応しくないと感じていたソーシャルメディアの日常利用に関する内容を、ALで実施したものである。ソーシャルメディアが登場したことで、個人(ユーザー)は強力な情報発信・共有の手段を手に入れつつも、その一方で、ベンダーが提供するプラットフォームの中で、そのビジネスモデルに従った行動を強いられている。ベンダーが利便性の高いサービスを追求した結果、ユーザー数の拡大に繋がったと解釈できる一方で、ユーザーの誰かと繋がりたいという心理や自己顕示欲・承認欲求などを、効果的に刺激するサービスを投入することにより、人間の根源的欲求をトラップすることで、ユーザー数や利用時間の増大を促進しているという側面もあるといえる。この様な内容を講義するよりも、多くのユーザーがソーシャルメディアの日常利用で感じている正負の両面についての意見や感情、経験に数多く触れることが最良だと考えて、このALを構築した。タークルのTED TALKとそれに対する7人の対談記録が存在したことが、このALの構築に最も不可欠な要素である。7人のメンバー構成は、大学生2名とIT分野、他、で活躍する社会人5名であり、タークルのトークに賛成よりも反対意見を多く述べている。タークルのような専門家でも、過去の自分の意見を現在は変えたことや、同氏を含めた背景や立場の違う複数の人物によって、意見が対立して、結論が収束していない状況を設定できたことも重要であると考えている。

6節では、3つのALに対して受講生にアンケート調査を行った結果についてまとめた。受講生140人(履修登録者数)の内、回答者数は97人であった。表1にまとめた通り、その内の84.5%が3つのALがメディアリテラシーの向上に「とても役立った」「役立った」と評価している。このように「肯定的な回答」をした回答者の評価理由について分析を行い、表2にまとめた。①と②は自己と他者に関する内容として別分類になっているが、いずれもALに能動的に取り組んだことを示していると推測できる。表3は3つのALに関する意見や感想の単なる自由記述であるが、①②については、表2より高い数値を示している。また、表2と表3を合算した表4では、①②に加えて、③の知

識修得に関する内容も、50%以上の数値を示しており、ALの本来の趣旨が機能していると思われる。他方、表1で「どちらでもない」「全く役に立たなかった」「分からない」と回答したのは15人であり、6.2ではその自由記述の内容を分類した。その結果、ALに対して、「(b)内容に興味が無い」「(c)記述内容の共有・評価などの学習方法への批判」という根本的な批判を3人が記述していることが分かった。

筆者は3つのALのいずれにおいても、受講生の記述や投票結果を整理し、閲覧可能にする役割だけを極力担うように努めた。特に記述については、受講生間の投票や理由記述による相互評価に委ねて、筆者が評価を述べることは敢えてしなかった。そのことが、2.1で述べた「日常的なレベルでの言論の自由がもたらす多様性の豊かさ」を、3つのALを通して受講生が間接的に感じ取れることに資すると考えた次第である。

以上に基づく、3つのALが一定以上の学習効果を受講生にもたらしていると結論できるが、各受講生が成果と感じている内容が妥当であるか、各ALで設定している目標をどの程度達成しているかは、更なる検証が必要であるが、それは将来的な課題としたい。

参考文献・注

- [1] Cameron Russell, Looks aren't everything. Believe me, I'm a model., TEDxMidAtlantic, 2012
- [2] [1]に関する内容を紹介したり、批評したりしているサイトは、Google検索をするとかなりの数が存在することが分かる。
- [3] Sherry Turkle, Connected, but alone? Official TED conference, 2012
- [4] 田中健吾、ソーシャルメディアで緊密に繋がった人間関係について考える教育の試み、大学ICT推進協議会2015、2B1-3、2015年
- [5] 入谷聡、長村ひかり、古賀健太、新清士、伊藤穰一、金谷美加、久保田大海、スーパーハングアウト of シェリー・タークル on Google+, 2012年。この文献を5節で対談記録と呼んでいる。この文献はWebサイト上に掲載されていたが、2018年9月現在、閉鎖されている。
- [6] Sherry Turkle, Alone Together : Why We Expect More from Technology and Less from Each Other, Basic Books, 2011
- [7] Sherry Turkle, The Second Self: Computers and the Human Spirit, Simon & Schuster, 1984
- [8] Sherry Turkle, Life on the Screen: Identity in the Age of Internet, Simon & Schuster, 1998